

現代語の感動喚体句の構造と形式

笹井 香

1 はじめに

山田文法において、「あはれうるはしき花かな。」のような感動喚体句は、その「意義」が「感動」であるとされる⁽¹⁾。述体句とは異なり、文に示されている情報についての伝達を目的とはしない、話し手の感動を表出する文である。山田孝雄（1936）の挙げる例「うるはしき月かな。」であれば、文に示されているのは「月」、即ちモノ（＝ことばによって示される体言を意味する）についての情報である。しかし、この文は、話し手にとっても、また聞き手にとっても、モノについての情報を伝達するものではない。聞き手はこの種の文を話し手の情意表現として把握する。感動喚体句が話し手の感動を表出することを専らとする形式だからこそ、情報を伝達する文ではなく情意表現として理解されるのである。これは、文の形式が表現を支えていることを意味している。

本稿は、現代語において感動喚体句と同じ構造を持っている文を感動文と位置づけ、感動を表出することを専らとする形式のバリエーションを提示しようとするものである。

2 感動文の構造と表現

2-1 感動喚体句の構造

次に示すのは、山田（1936）に挙げられている感動喚体句の例である。

あはれうるはしき花かな。

あ、山中の青葉のうつくしさよ。

感動喚体句は、「直感的一元性の發表にして、感情的の發表形式」とされる。「構成上の必要條件」は「中心たる體言と連體格」であり、「中心たる體言」は「感動の對象」を示すものとして、「連體格」は「その感動を寓せる點が如何なる所に存するかを示す為にその状態を指示するもの」として句の中に現れているのだと述べられている⁽¹⁾。感動喚体句の「中心たる體言と連體格」という形式は、川端善明（1965）において「句的な体言」の構造を持つものとして、次のように理解された。

『美しき花かも』の形式は、そこに博士の説かれた以上の意味をもたねばならない。第一にその「美しき」は、「中心骨子たる対象の意義を明かに示す為」の、つまり語「花」の概念限定的な連体修飾語と解されるべきではない。それは、その概念的属性においてではなく、それが在るといふそのことにおいて、「コレ」としての「花」の個的定立に働く述語である。「美しき花」は連体修飾語を含んだ一つの語ではなく、「花」と「美し」の主述性において構成された一つの句であり、しかもその述語の「コレ」の定立をなす自同性において、こととしての句の極限なのである。しかも、その主述の倒逆形式たる「美しき花」の構造は、こうした主述が、一面としての「美し」の概念的属性を通じて、二項対立的な主述に、即ち述体的な主述に実現することの、未分節的な、或いは実現として拒否的であることを意味するものである。

ここで言う「句的な体言」は、川端善明（1963）では「句的体言」と呼ばれているが、これはモノの提示でありながら、「二項対立的な主述」としての述体句としては実現されない「コト」を構成しているということに着目したすぐれた把握であると思われる。「あはれうるはしき花かな。」「あ、山中の青葉のうつくしさよ。」という感動喚体句であれば、「(うるはしき) 花」「(山中の青葉の) うつくしさ」のようなモノを指示しているの

ではなく、「花がうるはしいコト」「山中の青葉がうつくしいコト」を構成しているのであり、しかし「花がうるはしい」「山中の青葉がうつくしい」という述体句としての形式を持たないのである。

本稿は川端（1965）の理解にしたがい、感動喚体句の構造を句的体言と把握し、句的体言の構造を持つ文を感動文と位置づけることとする。このように考えたとき、現代語の感動文には、「美しい花！」のような感動喚体句と同等の形式をもつものと、「なんて美しい花だろう！」のような恐らくは疑問文から派生した形式をもつものの二種があると考えられるが、本稿では、前者、即ち感動喚体句と同等の形式をもつものを「美しい花！」型感動文と呼び、専らこの型の感動文について考察したい⁽²⁾。なお、「感動喚体句と同等の形式」というのは、文全体の形式が体言句であるような形式のことである。

2-2 対象現前性

感動するという精神上的の活動は、感動の対象が眼前に実在するか、あるいは、頭の中に思い描かれていなければ行われない⁽³⁾。つまり、発話時の話し手の感動を表出するという性質上、感動文は必然的に対象現前性を持っているのである。例えば、「美しい花！」型感動文の形式の一つである「きれいな花」という語列は、感動文としてコトを構成する場合もあるし、叙述文の一部として、あるいは体言句としてモノを示す場合もある。それぞれの場合で内部構造は異なるが、その違いは「きれいな花」という形式には現れない。にも関わらず、「きれいな花！」が感動文として理解されるのは、対象現前性を持っている場面での（これだけで独立した）発話だということを、聞き手は言語場や文脈から知っているからである。つまり、「美しい花！」型感動文は感動文としての形式を備えてはいるが、感動文として成立するには結局、文脈・言語場の支えによらなければならない。即ち、対象現前性を持つという意味において、すべての感動文は現語場に依存しているのである。

山田(1936)において「犬。」「火事。」のような名詞による一語文は「一の思想をその言語に寓して同じ社会の人がこれに對して一定の思想を必然的に喚起」することができないため「不完備句」とされ、考察の対象とはならなかった⁽⁴⁾。本稿も名詞による一語文は考察の対象とはしない。連体修飾語を持たない一語文はコトを構成しないため、表現を支える形式を持つ文であるとは見せないからである。したがって、本稿では、コトの構成を言語場に依存せず、語列自身がなすことを感動文の完備句たる資格と考えたい。

2-3 感動文の表現

感動文に表現されているのは、語列自身が構成する「コト」に対する話し手の情意だと考えられる。「きれいな花！」であれば、「花がきれいであるコト」に対する話し手の情意が表出されている。厳密に言うならば、感動の対象として示されている「花」は、まさに眼前にある（あるいは頭の中に思い描かれている）「個的定立」（川端（1965））が果たされた「コレ」としての「花」であるから、「眼前のこの花がきれいであるコト」に対する話し手の情意が表出されているのである。

そして、話し手にとって事態がありふれた普通の事態であれば、感動の対象にもならないし、感動文として表出されることもない。どこにでもあのようなきれいさではなく、きれいさの程度が甚だしい時、「きれいな花！」という感動文が発せられる。逆に言えば、感動文に表現されているのは、事態のもつ属性の「程度の甚だしさ」に対する話し手の感動だと考えられる。「(眼前のこの)花がきれいであるコト」という事態の属性の「程度の甚だしさ」に対する話し手の情意が表出されているのである。

ただし、ここで言う「程度の甚だしさ」とは、感動の対象のもつ属性そのものの客観的な程度を意味しない。客観的には程度が低いとしても、情意とはあくまで話し手の側にあるものであるから、話し手の期待値（予想値）以上であるという意味において「程度が甚だしい」のである。さら

に、美しさなど全く期待していなかったものに対して思いがけず美しさを感じた場面で、「あ、きれい！」と言う時の意外性もまた期待値（予想値）以上の事態との遭遇による意外性であり、「程度の甚だしさ」に含めて考えたい。

感動文は必ず対象現前性を有しているが、体言形式が対象現前性を伴う場面で運用されていれば、必ず話し手の情意を表現する感動文であるというわけではない。「美しい花！」型感動文について注意すべきなのは、不完全叙述の述語との混同である。不完全叙述とは、芳賀綏（1978）において「三四郎の目に美禰子の姿が映じた。思わず「あっ、美禰子さん！」と叫んだとすると、これは「美禰さんだ。」という叙述要素をはしょった形——すなわち述語です。」と説明される述語を指す。このような、あることを発見したり、何かに気付いたりする場面で運用される不完全叙述の述語として現れる体言形式は、あくまでモノに対応する語列であり、「程度の甚だしさ」を意味する感動文とは言えないであろう。

3 「美しい花！」型感動文の形式的類型

「美しい花！」型感動文として、次に示す5つのタイプがあると考えられる。

- A-1 逆述語タイプ
- A-2 「(～の)ーこと」タイプ
- A-3 「～のーさ」タイプ
- A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプ
- A-5 形容動詞連体形タイプ

句的体言の構造を持つ文は体言形式になっているため、体言形式のありようによって上記の5つのタイプに分類することができる。この節では各タイプについて例を挙げて具体的に検討することにしたい⁽⁵⁾。なお、ここに感動文として挙げる用例は、指定の助動詞「だ」を省略した叙述文ではな

いことが文脈より容易に判断されるものである。

A-1 逆述語タイプ

- 1 (子供らしさのあふれた部屋を見て)「まあ かわいいお部屋」『ベビー』8巻 p 54
- 2 (一人では何もできない女の子の様子を見て)「世話のかかる女」『空』p 141
- 3 (美人ばかりの女性客グループを遠目に眺めて)「きれいなおネエさんたち 4人並ぶとますますゴージャス」『SLIP』p 15
- 4 (美しい女性を見て、心内語) ふーん キレイなコ! なに者? 『ライン』1巻 p 121
- 5 (夫婦の会話) 夫:(別居中の妻に向けて)「おれに帰ってほしいのかよ。」妻:「どうでもいいわ。でもワイドショーに追っかけられるなんてごめんですから。」(と言い残し、妻は立ち去ってしまう) 夫:「かわいげのねー女っ!帰ってほしいくらい言えねーのか!」『ベビー』2巻 p 123
- 6 (今から罠に陥れようとしている相手が、そのことには全く気付かず「君と同じ屋根の下で眠れるなんて嬉しいな。」とはしゃいでいるのを見て、心内語) 今のうちに調子に乗っておけ。ばかなやつ 『愛』p 84
- 7 (おいしい葡萄とワインを勧めても食べようとしない精さんに、ワイナリーの経営者が尋ねる) 経営者:「…おや? 精さんはブドウもワインも嫌いかえ?」 精さん:「あー つまり共食いになりますので…」 女の子:(この会話をそばで聞いていて、心内語) …共食い? 変な奴… 『美貌』p 102
- 8 (好きな女の子に「頭弱いからっていい気になるんじゃないねー! 向こう行けよターコッ」と言われたが、自分に対して素直になれないで憎まれ口をきいているのだと理解して、心内語) かわいい奴 『ミ

ホ』 p 212

山田（1936）の「感動喚体句」の形式の最も典型的なタイプである。「美しい花！」のように、形式上の連体修飾語を述語とする主語が体言の位置に現れている句的体言、即ち川端（1963）の言う「ジャンクション一般」と同様の形式を持つ文を逆述語タイプと呼ぶ。

喚體における「美しき」と「花」とは、ジャンクション一般と全く同じ歸屬の形式をとつてはいるけれど（中略）、實質的には分離的に保たれていなければならないのである。——と言え、それは、實質的にネクサス（述體）とも根本的な或る共通性を言つてゐることになる。即ち、喚體における『美しき花』はものではなくことに、事物ではなく事態に對應するのである。なおもそれを連體關係ともし呼ぶならば、それはもの意義をより明かにするためのそれではなく、こと構成のためのそれである、と言わねばならない。

形式上の連体修飾語には形容詞、形容動詞が多く見られるが、例文2のように動詞も見られる。ここに形式上の連体修飾語として現れる動詞は、形容詞、形容動詞のように属性を示す動詞に限られる。このことは次項のA-2「(～の)ーこと」タイプにも当てはまる。例えば、「食べる」が連体修飾語である「食べる人」は、属性概念を示さないため、「程度の甚だしさ」に対する話し手の情意を表出する感動文としての表現は持たない。一方、「世話がかかる」は「この女は世話がかかる。」のように「この女」の属性を示すことができる動詞であるため、「世話のかかる女」は程度の甚だしさに対する話し手の情意を表出するという感動文としての表現を持つのである。

ここでは、感動の対象が、主語である体言で示される。感動の対象は、常に「個的定立」としての「コレ」である。しかし、このタイプは、感動の対象である体言が、眼前の個的存在であることを指示する語を形式としては持たない（「*美しいこの花！」などとは言わない）。したがって、対象現前性を持っていることが形式には示されず、言語場からの情報として

対象現前性を持つ文であることを知ることによってのみ、対象が「コレ」であることが理解される。つまり、対象現前性を持つという感動文としての現語場を想定しなければ、感動文の形式とは理解されず感動文として成立しない形式なのである。

山田(1936)に、感動喚体句の体言は呼格だと述べられているが^{s(6)}、現代語の感動文においても、骨子となっている体言は呼格であることが、例文9のような文に示されている。

- 9 (自分の裏切りで狂死してしまった恋人ジゼルを思いながら)「はくはなんとという罪ぶかいことをしてしまったんだろう!……どうか許しておくれ。かわいそうなジゼルよ……!」「ジゼル」p 50

「どうか許しておくれ。」という言葉聞かせようとしてジゼルに呼びかけていると理解すると「(かわいそうな)ジゼルよ!」であり、連体修飾語「かわいそうな」は単に「ジゼル」を限定しているだけである。しかし、自分の裏切りのせいで亡くなってしまったジゼルの哀れさに向けられた言葉だと理解すると、「ジゼルがかわいそうであるコト」への情意表現となるのである。実際には、呼びかけでもあり、情意表現でもあり、いずれかとして理解されるのではなく、両方の性質を兼ね備えたものとして理解されるだろう。感動文の骨子となっている体言は呼格であり、それゆえに呼びかけとの連続性を持っていることが示されている例であろう。

A-2 「(～の)ーこと」タイプ

- 10 (少女の笑顔を目にして)「かわらいらしいこと…」『美貌』p 119
- 11 息子：(珍しく母親に電話して)「あ かーさん? 元気?」母親：
「あら陽平さん? めずらしいこと。どうかしたの。」『ファン』p 181
- 12 (好みではない人の顔を見た後、好きな人の顔を見つめながら、心内語) …それに比べて智彦様の目許のすずしげなこと『美貌』p 69
- 13 鯛焼きの屋台の前にしょんぼりと立って、いつまでも離れないので、おじさんがあわれに思ったのか、ひとつをタダでくれたことが

あった。そのおいしかったこと。『変る』 p 185

14(子供の表情を回想して) この顔のおかしかったこと。『ママ』 中巻
p 48

「そのおいしかったこと」のように、A-1 逆述語タイプとは異なり、主述全体で「こと」を修飾している形式を「(～の)ーこと」タイプと呼ぼう。ここでも、主語(「～の」)は感動の対象を示し、「(智彦様の目許が)すずしげであるコト(例文 12)」を構成する。ただし、目の前で起こっていることに対しては、例文 10-11 が示すように感動の対象は必ずしも示されない。過去の場合(あるいは頭の中に出来事を思い浮かべている場合)は、例文 13-14 が示すように「～の」が必須である。

「～の」により感動の対象が示される場合に、A-1 逆述語タイプとは異なり、対象が個的存在として示されることがある。例文 13-14 のような、眼前の(この場合は頭の中に思い浮かべている)個的存在であることを指示する指示語を形式に持つ場合である。この時、対象現前性を持っている言語状況での発話であることが形式によって保証されるため、感動文の解釈に導かれやすくなるのである。ただし、例文 12 の固有名詞「智彦様の」は対象を特定化してはいるが、眼前の個的存在であることは指示しない。したがって、A-1 逆述語タイプや、対象を示さない例文 10-11 のように、対象現前性を持つという感動文としての言語場を想定しなければ、感動文の形式とは理解されず感動文として成立しないだろう。また、指示語や固有名詞によって対象を指示しない「ボカに気付いた後の夕食の不味いことよ。(安達(2002)より実例を引例)」のような文もある。これにおいても、対象が眼前の個的存在であることは特に示されず、例文 12 と同じことが言えるだろう。ただし、この文は終助詞「よ」を持ち、「～ことよ」がいわば呼格として機能していることが明らかであるため、感動文であることが理解されやすくなっていると言えよう。なお、ここで述べた A-2 「(～の)ーこと」についての考察は、次項の A-3 「(～の)ーさ」タイプにも当てはまることである。

次に挙げる例文 15-16 は、感動文と同様の言語状況を持ち、表現も感動文と何ら変わりがないと考えられる。しかし、大鹿薫久（1989）、安達太郎（2002）に、名詞文の文末に現れる「こと」は終助詞的であるとの指摘があるように、例文 15 において「いけないママだ」は「こと」を修飾してはいない。したがって、句的体言の構造を備えているとは考えられず、感動文とは位置づけられない。

15(家を出て行った母親を健気に待ち続ける幼い純くんの姿を目の当たりにして)「純くんをこんなに寂しくさせて…… いけないママだこと……」『ベビー』8巻 p 15

16(美しい月夜に空を見上げながら)「本当にいい夜ですこと」『ベビー』8巻 p 112

また、感動の対象となる事態が眼前にある場合には、「-こと」の代わりに、例文 17-19 のように体言化辞「-の」で句的体言が構成されることがある。このような文も A-2 「(～の)-こと」タイプに含めることとする。言うまでもないことだが、ここでの「へんなのオ～」は実際の発話に際しては「の」が強く高く発音され、「(最近彼の様子はとても) 変なの」のような「だ」を省略した述体句とは異なる。

17(観光地の露天風呂に入ったが、予想に反して誰もいなかったので)「サルもないやー つまんないのー」『ミホ』p 271

18(不真面目な友人が前の方で授業を受ける姿を、離れたところから見かけて)「へんなのオ～ 授業なんかうけなくせに前にいくなんて」『ミホ』p 208

19(友人同士の会話) 女1:「その彼ってそんなにいい人なのォ?! 一度見てみたい紹介してよ ミホ」 女2:「だめよ だめ 彼は大人だしそーゆーのキライだしィ」 女1:「つまんないの ミホっていつもそーよねー」『ミホ』p 139

このタイプは「変なの!」「つまらないの!」に偏って観察され、「-の」

による句的体言を構成する形容詞、形容動詞には制限があるように思われる。また、句的体言が「ーこと」により構成される場合は、例文 12 のように感動の対象が眼前にある場合でも、感動の対象を「～の」で示すことがあるが、「ーの」で句的体言が構成される場合は、感動の対象「～の」は観察されない。

A-3 「～のーさ」タイプ

20 かわいいお嬢さんたちである。着ているものも洒落ている。そんなに服のセンスがあるのにこの常識のなさ。『変る』 p 296

21 女1:「あら、でもあのライヴはサイコーだったよー」男:「ケンカがね！」女1:「女の子たちにけががなくてよかったよねー」男:「そー助かったよ 泣いてたコいたもんね」女1・2:「あたしたちだって泣きたかったもんね～～ッ！！」男:(女1・2のこの発言を聞いて、心内語) 身内のこのシビアさ…『ファン』 p 266

22 「作品一一一の無茶苦茶な速さ!」安達(2002)より実例を引例

山田(1936)に、現代語にも見られる感動喚体句の例として挙げられている形式である⁽¹⁾。「この常識のなさ」のように、主語が「～の」で示され、述語が形容詞語幹・形容動詞語幹に接尾辞「さ」を付けてできた名詞となっている形式を「～のーさ」タイプと呼ぼう。A-1 逆述語タイプ、A-2 「(～の)ーこと」タイプのような、属性を表す働きを持つ語が体言を修飾することによる句的体言とは異なり、属性を表す働きを持つ形容詞・形容動詞が体言となって現れ、句的体言を構成している。また、A-2 「(～の)ーこと」タイプと同様に、感動の対象が主語「～の」で示されるが、ここでは「～の」による対象の提示は必須である。

このタイプは、上に述べた句的体言の構成以外の点においては、A-2 「(～の)ーこと」タイプと同様の特徴を持っている。したがって、例文 20-21 のように、眼前の個的存在を指示する指示語によって感動の対象が示される場合は、感動文の解釈に導かれやすくなるだろう。なお、例文 21

は、「身内の」も感動の対象を示しているが、「この」によってまさに眼前の事態を指示しているのである。

一方、例文 22 は固有名詞「作品――」で対象を指示しているが、前述のように固有名詞は「コレ」としての個的定立に働かないから、感動文としての言語場を想定しなければ、感動文の形式とは理解されず感動文として成立しない。

次に挙げる例文 23-24 は、このタイプ同様、形容動詞語幹に接尾辞「さ」を付けた名詞が文の最後に来ているが、このタイプでは必須だと述べた感動の対象を示す「～の」を持たない。

23(牧場に遊びに来ている郁子に向かって、牧場主がその場にいるにも関わらず、郁子の知人が以下の発言をする。)「郁子さん あなたもあまりここへ近づかない方がいいな 髪や服に牛のニオイがうつりますよ」郁子:(この発言を聞いて、心内語) 思わず目の前が真っ暗になる無神経さ!! 『美貌』p 74

24(擬人化された牛と馬との会話) 馬 1:(フォンタナゴールド (=馬 2) が牛と親しくしている様子を見て)「やあ、フォンタナゴールドやはり牛とつるんでる方がお似合いだよ君は。」馬 2・牛:(この発言を聞いて、心内語) 思わず吐き気をもよおす傲慢さ 『美貌』p 74
これらは、A-3「～のーさ」タイプではなく、A-1 逆述語タイプだと考えられる。感動の対象は「無神経さ」「傲慢さ」であり、形式上の連体修飾語は「思わず目の前が真っ暗になる [ほどの] 無神経さ」「思わず吐き気をもよおす [ほどの] 傲慢さ」のように尋常ならざる程度の甚だしさを示しているのである。したがって、「この無神経さが、思わず目の前が真っ暗になるほどであるコト」「この傲慢さが、思わず吐き気をもよおすほどであるコト」を構成する句的体言であると言えよう。

A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプ

25 女 1:「早苗さん、あなたわたしに会うのがこわいのね」女 2:「…

- ええ少し…」女1:「まあ、かわいい。いいこねえ、あなたは。(後略)」『石』p 99
- 26(桃を一口食べて)「おいし…」『アル』p 146
- 27(お風呂で体を洗ってもらっている子供が痛がって)「いたーっ」『ママ』中巻 p 18
- 28(お酒に弱い友人が、一口のお酒で目をまわしたのを見て)「よっわー」『アル』p 109
- 29(激辛カレーを一口食べて)「からー うっまー 激甘アイスティーとよく合うわ」『アル』p 173
- 30(花火を見て思わず)「わー きれい…」『Papa』p 43
- 31(中学1年生の息子と母親の会話) 息子:「やだな～ かーさんてば そんなあからさまに… でもできれば将来私のお嫁さんにお迎えしたい…などと」母:「まあ素敵 でも肝心の苑生さんが何とおっしゃるか…」『美貌』p 143
- 32(鼻緒が切れたのを見て)「やだ～ 星形くん 鼻緒が切れてるわよ オ 不吉う」『ミホ』p 168
- 33(リューマチで痛がる友人の様子を見て)「うわー 大変」『ミホ』p 267
- 34(大嫌いな人と二人きりになり困っているところに、知り合いが忘れ物を届けに来てくれて、心内語) ラッキー!!『美貌』p 66
- 35(高級老舗旅館でおいしい食事をお腹いっぱい食べて)「幸せ～」『ミホ』p 262
- 36 これまでは娘をつれて浮きうきと歩いている友人の姿を見ると非常に羨ましいと思ってきたが、昼の朝顔のようにシオれきった彼を見ると (ああ、幸福、幸福) という実感がこみあげてきた。『変る』p 249
- 「熱(あつ)！」「きれい！」のような、形容詞語幹・形容動詞語幹で終止する文もまた句的体言の構造を持つ感動文の一つのタイプだとみなす。

句的体言であるためには体言形式で文が構成されている必要があるが、形容詞語幹・形容動詞語幹そのものが体言資格を持っており、「熱いコト」「きれいであるコト」を構成すると考えられるのである。属性を表す働きを持つ形容詞・形容動詞が、体言性のある語幹の形式で運用され句的体言となっているタイプである。

形容動詞語幹が体言資格を持つことは、周知の通り時枝誠記（1905）などで述べられている。また、形容詞語幹の体言性についても指摘が多いが、例えば飯豊毅一（1973）は「語幹がそのまま名詞として用いられることがある」とし、「赤と青と白と黒の旗を用意した。」「わか（若）をよんで来い。」などの例を挙げている。他にも「長の別れ」のように語幹に格助詞「の」が付いて連体修飾語となるという指摘もなされている。このような独立性の高さにより形容詞語幹も体言資格を有すると考える。

このタイプは、体言資格による句的体言である。したがって、名詞として運用されることのある一部の形容詞語幹・形容動詞語幹以外はモノを示すことはなく、基本的には感動文として現れるだろう。モノを示さない形式であることに支えられ、A-1 逆述語タイプ、A-2 「(～の)ーこと」タイプ、A-3 「～のーさ」タイプとは異なり、対象現前性を持つという感動文としての言語場を想定しなくても、感動文以外にはありえない形式になっている。しかし、感動の対象は形式に示されず、やはり言語場や文脈に拠らなければ感動文としては成立しないのである。なお、ここでの考察は、次項の A-5 形容動詞連体形タイプにも当てはまる。

ただし、名詞として運用されることがある形容動詞語幹による句的体言の場合、感動文であるかどうか判然としないことがある。例文 35-36 の「幸せ」「幸福」は独立した名詞としても運用される語だが、この場合は感動表現としての解釈が自然であろう。しかし、例文 37-38 の「ばか」ともなると、感動文とも、「罵ることを目的とする文」とも、そのいずれかには判断できず、両方の性質を持ちあわせていると考えられる。

37(好意を持っている男の子に、ついうっかり好意を持っていること

がばれるような態度を取ってしまったが、全く気付かれなかったことを思い出し、心内語の後で、ひとり言をつぶやく)でもヨーヘーくんたら気が付かないんだもんナ——「バカ!」『ファン』 p 159

38(誕生日の朝に友人一同からしゃれにならないいたずらを仕掛けられ、一日中迷惑を被った。夕方にその悪ふざけをした友人一同と直接会った時に、思わず)「ばかっ!ばかっ!あんたたちって何かにかこつけて結局自分が遊びたいだけなんだから」『ファン』 p 154

「罵ることを目的とする文」とは呼びかけの一種だと考えられる「バカ野郎!」「愚か者!」のような文のことである。「なっ何ちゅーやべーもん持って来てんだよ このバカっ!!『ごく』 p 70」の「このバカ」は、もはや形容動詞語幹ではなく体言そのものになっており、罵ることを目的とする文と同様の働きをしている。例文 37-38 も「バカ」を語幹だと考えると感動文であり、体言だと考えると「このバカっ!!」同様に、相手を罵ることを目的とする文として働くのである。

A-5 形容動詞連体形タイプ

39 男:「あーあ マジで善意の酒なんだろコレ だまされてるのも知らないで」女:「失敬な めちゃくちゃかわいがってるのよわたし」『ライン』 2 巻 p 102

40(高校生の娘が駆け落ちの計画をしていることに勘付いた時の夫婦の会話) 夫:「ちーちゃくても女だなーっ。」妻:「呑気な!!」『美紅』 p 241

41(変な化粧をした女性の顔を見て思わず)「ブサイクな!!」『RU』 p 89

42 教師 1:「それともそちらの棄権ってことでこっちの不戦勝にしても…」教師 2:「バかなっ!! やりますともっ 頭にきてるんだ」『ごく』 p 85

43(外国の人が日本に来て、友人から日本語が下手だと言われて)「無

礼な！私はちゃんと学んできたぞ！」『ミホ』 p 29

44 少年：「あなたのナイフはあまりにも手入れが杜撰なので使い物にならないだろう——と言っている」殺し屋：「しっ……失礼な！」
『美貌』 p 167

45(母と息子の会話。息子は嫌がっているが、母親は家のために政略結婚をさせたがっている。) 母：「あなたの結婚相手としてこれ以上はないというくらいの方なのよ。」 息子：「そんな勝手な…」『ミホ』
p 349

46(担任している生徒が退学届を提出したことを間接的に聞いて、心内語) そんなバカな！あいつが何も言わずにいなくなるなんて…
『ごく』 p 155

連体形はそれだけで体言資格を持つと考えられる。形容動詞連体形、形容詞連体形が名詞と同様に用いられることについて、飯豊（1973）に「あるいは林塘の妙なるあり」「山河の巖々たるより百尺の滝水漲り落たり」、「乏しきをうれへず等しからざるをうれふ」「そのあまり軽きに驚きたり」との例が示されている。属性を表す働きを持つ形容動詞が体言性のある連体形の形式で運用されている例文 39-46 のような文は、「失敬であるコト」「呑気であることコト」のようにコトを構成することができ、句的体言だと言えるだろう。なお、形容詞連体形については、現代語において形容詞は終止形・連体形が同形で現れるため、「うわあ、かわいい！」のような場合の形容詞の活用形は判別できない。したがって、句的体言の構造を持っているかどうか分からないため、ここでは扱わないこととする。

このタイプは、A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプ同様に、属性概念を持つ語が体言資格を持つ形式で運用されることによる句的体言である。この形式は体言句や叙述文の一部としてモノを示すことがなく、対象現前性を持っているという言語場を想定しなくても、感動文だと理解される形式である。ただし、感動の対象が形式上示されないため、感動文として成立するには言語場に依存する。

理論的には、このタイプに見られる形容動詞で、A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプの句的体言を構成することができる。しかし、実例から判断すると、A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプと A-5 形容動詞連体形タイプでは形容動詞が使い分けられているように思われる。ここに観察される例文 39、44 の形容動詞「失敬だ」「失礼だ」は、A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプの形式である語幹「失敬」「失礼」で運用されるとき、謝罪の表現であり、感動文としての表現は持たない。また、形容動詞「ばかだ」も、A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプの例文 37-38、A-5 形容動詞連体形タイプの例文 42、46 に観察されるが、意味の使い分けが見られる。例文 37-38 は感動の対象となっているのが「ばかだと話し手が判断した人」である。一方、例文 42、46 の感動の対象は「棄権したことにして不戦勝にしようというばかげた提案」「担任している生徒が何も言わずに退学届を出したという信じがたい事態」であって、人ではない。つまり、形容動詞「ばかだ」が A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプと A-5 形容動詞連体形タイプでは異なる意味で用いられていることを意味している。

さらに、A-5 形容動詞連体形タイプには、「*素敵な!」「*きれいな!」のような文は観察されず、例文として挙げているような語に偏って観察され⁽⁷⁾、このタイプの句的体言を構成する語は、他のタイプとは異なり、いわば批判的な評価を示す語に制限されている。このタイプは非難・あってはならないといった口調に偏って運用されているのが特徴的で、感動の対象を批判的に捉えている場合に限って運用される、批判的な表現に特化した感動文だと考えられる。

例文 45-46 の「そんな」は、A-2 「(～の)ーこと」タイプ、A-3 「～のーさ」タイプに見られる「この」などとは異なり、対象が個的存在であることを指示しているのではない。「この美しさ!」の「こ」は、「美しい」の主語で、「こ(目の前の状況)が美しいコト」を表してもいる。「そんな勝手な」「そんなばかな」もまた目の前で起こっていることが対象だが、

「そんな」は対象である目の前の事態を主語として指すのではなく、単に様態を限定しているだけであろう。

ただし、眼前の事態に対して「こんな」ではなく「そんな」が用いられることには意味がある。指示語の「ソ系」は現場指示の場合、話し手から距離をとるように機能する。予想もしていなかった、しかも自分にとって遠ざけたいことが起こった時に「そんな！」と言うのもその機能の表れである。ここに見られる「そんなバカな！」の「そんな」も、「そんな！」と同様に、事態が話し手にとって遠ざけたい、あってはならないような事態であることを含意していると考えられる。したがって、例文45-46に「そんな」が現れるのは、このタイプが批判的な表現に特化した感動文であることを裏付けるものだろう。

4 おわりに

対象現前性を持つという感動文としての言語場を想定されなくても感動文の形式である A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプ、A-5 形容動詞連体形タイプは、句的体言としての自立性（＝句的体言の現れとしての言語形式の自立性）が高い形式だと言えるだろう。一方、A-1 逆述語タイプ、A-2 「(～の)ーこと」タイプ、A-3 「～のーさ」タイプのような、感動文としての言語場を想定されなければ感動文の形式とは理解されないタイプは、句的体言としての自立性が弱いと言えるだろう。「美しい花！」型感動文の各タイプの形式上の特徴を表にすると表1のようになる。各タイプの句的体言としての自立性は、句的体言を構成する体言形式によって異なっているのである。

なお、言語形式としての句的体言の自立性の問題ではないが、句的体言としての自立性の弱い3タイプのうち、A-2 「(～の)ーこと」タイプ、A-3 「～のーさ」タイプは、感動の対象が眼前の個的存在であることを指示する指示語を持つ場合がある。その時は、対象現前性を持っていること

が保証されるため、感動文の解釈に導かれやすくなるのである。

表 1

	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5
句的体言の構成	属性を示す語と体言が分離し、句的体言を構成する		属性を示す語が体言（体言資格）となって句的体言を構成する		
句的体言を構成する体言形式	体言			体言資格の語	
感動の対象	示す*1			示さない	
感動の対象が眼前の個的存在であることを示す語の有無	持たない	持つことがある*2		/	

*1 A-2 は、感動の対象が眼前にある場合に限り、示さないことがある（例文 10-11、17-19）。

*2 A-2、A-3 とともに、持つ場合と持たない場合がある（例文 10-14、17-19、20-22）。

句的体言としての自立性が弱いタイプは感動文の形式であることを言語場に依存し、それによって感動文として成立する。また、句的体言としての自立性の高いタイプも、言語場に支えられなければ感動の対象を示すことができず、言語場に依存することで感動文として成立する。「美しい花！」型感動文は、いわば言語場込みの感動文なのである。感動を表現することを専らとする形式でありながら、言語場に支えられなければ感動文として成立しないのは、「程度の甚だしさ」を本質的な意味としながら、それ自体を表す言語形式を持たないことが一因としてあるのだろう。本稿では触れられなかったが、「なんときれいな花だろう！」などの私に「なんと」型感動文とよぶものは、「なんと」により「程度の甚だしさ」を形式的に明示している。そのため常に感動文として理解され、「美しい花！」型感動文に比して言語場からの独立性が高くなるのである。

本稿は、感動喚体句の形式ではなく構造に着目し、構造から感動文を把握した。それによって、情意表現でありながら、先行研究においては考察

の対象とはならなかった A-4 形容詞語幹・形容動詞語幹タイプ、A-5 形容動詞連体形タイプのような形式も、感動文としての構造を備えていることを示し、より網羅的に感動文の形式を提示した。

注

- (1) 山田孝雄 (1936) p 936-p 963 「第四十五章喚體の句」
- (2) 「なんと～だろう！」の形式による文もまた句的体言の構造を持っており、「美しい花！」型感動文と並ぶ「なんと」型感動文として位置づけられる。なお、「なんと～だろう」の形式が感動文であることについての論証を展開した論文は、すでに稿を改めて論じている。
- (3) 感動の対象が必ずしも眼前に実在する必要がなく、頭の中に思い浮かべられていけばよいことは、例文 5 や例文 13-14 などに示されている。
- (4) 山田孝雄 (1936) p 907-p 924 「第四十三章句」
- (5) 尾上圭介 (1986)、大鹿薫久 (1988) (1989)、安達太郎 (2002) の感動文 (感嘆文) について示しておく。

尾上圭介 (1986) では、A わあ！ B ねずみ！ C 痛い！ D 青い空！（この形式は、本稿の「A-1 逆述語タイプ」に相当）E 空が青い！の文形式を持つものを感嘆文と規定する（ただし、尾上圭介 (1998) においては、形容詞による文「あつい！」や「空が青い！」は「述体」の側に位置づけられるものと訂正される）。

大鹿薫久 (1988) (1989) では、感動詞との関わりから感動文が考察されている。「ああ、ひどい」「ああ、こわ」「ああ、いい香り」「ああ、この広さ」「ああ、あの山の崇高なこと」などを喚体句と把握している。なお、「言語場内面にしか成立しない述体句も、感動詞や終助詞と接するとき、感動文として成立した。」とする。

安達太郎 (2002) では、「何と」による感嘆文」と「文末名詞による感嘆文」とを感嘆文とする。「文末名詞による感嘆文」は、「…属性 [実質名詞]」型感嘆文、「～の… [形容詞-さ]」型感嘆文、「～の…属性 [こと]」型感嘆文に分類され、本稿の「美しい花！」型感動文に含まれる形式である。しかし、その構造は句的体言であるとは捉えられておらず、属性は感嘆の誘因を示す修飾表現と把握されている。

- (6) 山田孝雄 (1936) p 924-p 936 「第四十四章句の類別」
- (7) 『生意気な 素人が！』『ベビー』8巻 p 83、「こしゃくな…」『ミホ』2巻 p 62 も観察される。「わがままな！」「迷惑な！」も耳にする文である。

例文出典

『愛』…青池保子『エロイカより愛をこめて16巻』／『空』…秋里和国『空飛ぶペンギン1巻』小学館／『変る』…遠藤周作『変るものと変らぬもの』文春文庫／『ファン』…岡野玲子『ファンシィダンス1巻』小学館文庫／『美貌』…川原泉『美貌の果実』白泉社文庫／『ジゼル』…谷村まち子『白鳥の湖バレエ名作集』ポプラ社／『アル』…西村しのぶ『アルコール1巻』集英社／『美紅』…西村しのぶ『美紅・舞子』光風社出版／『ライン』…西村しのぶ『ライン』講談社／『RU』…西村しのぶ『RUSH2巻』祥伝社／『SLIP』…西村しのぶ『SLIP1巻』白泉社／『ミホ』…二ノ宮知子『トレンドの女王ミホ4巻』講談社漫画文庫／『Papa』…秦野なな恵『Papa told me 21巻』集英社／『石』…三浦綾子『石の森』集英社文庫／『ごく』…森本梢子『ごくせん5巻』集英社／『ママ』…森本梢子『わたしがママよく完全版』集英社／『ベビー』…大和和紀『ベビーシッター・ギン』講談社

参考文献（引用あるいは言及したものに限る）

- 安達太郎（2002）「現代日本語の感嘆文をめぐって」『県立広島女子大学国際文化学部紀要』第10号
- 飯豊毅一（1973）「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞別日本文法講座形容詞・形容動詞』明治書院
- 大鹿薫久（1988）「感動文の構造——句と文についての把握——」『ことばとことのは第五集』
- 大鹿薫久（1989）「感動文の構造（承前）——句と文についての把握——」『ことばとことのは第六集』
- 尾上圭介（1986）「感嘆文と希求・命令文——喚体・述体概念の有効性——」『松村明教授古希記念国語研究論集』明治書院
- 尾上圭介（1998）「一語文の用法——“イマ・ココ”を離れない文の検討のために——」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院
- 川端善明（1963）「喚体と述体——係助詞と助動詞とその層——」『女子大國語文篇』15 大阪女子大学
- 川端善明（1965）「喚体と述体の交渉——希望表現における述語の層について——」『国語学』63
- 時枝誠記（1905）『日本文法口語編』岩波全書
- 芳賀綏（1978）『現代日本語の文法——日本文法教室・新訂版——』教育出版
- 山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館